社会学者が批評を書くこと
――新明正道と小林秀雄の論争より――

立命館大学大学院　寺前晏治

【1．目的】

本報告の目的は、新明正道における批評と社会学の関係性、より具体的には「イデオロギー」と「科学」がいかに結ばれ、そのうえで新明が批評に対していかなる態度をもって臨んでいたかを闡明にすることである。それにより、社会学者が批評を執筆することの意義、ならびにその営みが不可避的に呼び寄せる政治性が浮かび上がってくるのではないだろうか。

【2．方法】

新明は批評「イデオロギーの頽廃」（新明 1941）における「イデオロギー」と「思想」概念の規定をめぐって小林秀雄と論争を繰り広げる。この論争は小規模であったこと、また新明研究における時評への着目とその収集が比較的近年になってようやく進められたという事情もあり、あまり注目されてこなかった。本報告においては、当該資料が収録されている『思想への欲求』（新明 1941）と「イデオロギイの問題」（小林 2001）を中心として分析を進める。

【3．結果】

新明における「イデオロギーの頽廃」とされる事態の端緒とは、1939 年の独ソ不可侵条約の締結とそれに続く平沼内閣の総辞職である。従来、ナチズム対共産主義として両者はそのイデオロギーにおいて敵対関係にあるとみられていた。しかし両者が条約を締結することにより、知識人のみならず国民、政治家にいたるまで「イデオロギーへの信頼を裏切られた空白」のうちに置かれた（新明 1941: 62）。その反動から「イデオロギーから現実主義へ」と喧伝されることとなったが、それにより正当な「イデオロギー」（＝思想）までもが駆逐されるのではないかと新明は危惧を抱いている（新明 1941: 67）。他方、小林は「理論は書く人の空しい精神をかくす事が出来ない」とし、新明の「科学」をもって「現実」を把握するという所作を批判する（小林 2001: 580-582）。そこで小林は「科学」に対して「生活」に基づく「直かな観察」を置き、後者を重視するのである（小林 2001: 586）。すなわち、小林においては「思想」と「イデオロギー」は別物であり、さらに「学問」あるいは「科学知」というフィルターを通すことなく「現実」をつかむことが「批評」に要請されるのである。そして、批評家の「思想」は「イデオロギー」の覆いに隠されることなく、彼・彼女の「身振り」としてあらわれてくるものであると小林は主張する（小林 2001: 585）。

【4．結論】

新明・小林間の論点は、次の三点に要約される。第一に批評と学問を別物と考えるか否か、第二に「イデオロギー」と「思想」を同一の概念ととらえるか否か、第三に「現実」を「生活知」に求めるのか「科学知」にもとめるのか、である。新明における批評はあくまでも彼の「綜合社会学」の内部に位置づけられる。したがって、知識社会学を道具たてとした「科学知」という観点より「現実」を把握すること、それこそが社会学者・批評家としての新明の役割となるのである。社会学者でありながら批評家でもあり続けることが新明における知識人像である。

文献

小林秀雄，2001，「イデオロギイの問題」『小林秀雄全集第六巻：ドストエフスキイの生活』新潮社.
新明正道，1941，『思想への欲求』三笠書房.